

総 説

ドイツとスイスの宗教改革の断絶

柳澤 伸一

＜要 旨＞

本稿は、『ヨーロッパ宗教改革の連携と断絶』（2009）所収の四論文への論評を通して、16世紀におけるドイツとスイスの宗教改革の連携と断絶について考察するものである。

野々瀬浩司と岩倉依子は、『ヴィッテンベルク一致信条（1536）』をドイツのルター派と西南ドイツ諸都市の宗教改革派が受け入れ、スイスの宗教改革派が拒否したことを契機に、ドイツの宗教改革派とスイスの宗教改革派との間に永続的な断絶が、その反面でドイツの宗教改革派とスイスの宗教改革派それぞれの内部に恒久的な連携がもたらされた、と主張する。これに対して、和田光司は、スイスの宗教改革派が単一でなく、ツヴィングリ派だけでなくルター派も存在したこと、カルヴァンがドイツとスイスの宗教改革派を連携させてプロテスタントを迫害するフランスに介入させようとしたことなど注目すべき事実を指摘して、野々瀬・岩倉とは異なる見解を示した。また、西川杉子は、17、18世紀の宗教改革運動を考察対象として、諸宗派が国民間で断絶したことよりも、トランスナショナルに連携したことを強調する新しい観点を打ち出した。この観点は、16世紀におけるドイツとスイスの宗教改革の関係を考察する際にも有益であると思われる。

キーワード：ルター派 ツヴィングリ派 ブツァー カルヴァン ヴィッテンベルク一致信条

第1章 はじめに

2009年5月、森田安一編『ヨーロッパ宗教改革の連携と断絶』（教文館）が出版された。本書は三部構成で、第一部は、「ヨーロッパ宗教改革の連携と断絶」と題し、ジュネーヴの宗教改革者、ジャン・カルヴァンの生誕500年を記念して、2008年11月に日本女子大学で開かれたシンポジウムでの報告が基になっている。第二部は、「宗教改革の諸相」と題し、16世紀前半の出来事を扱う論文を集め、第三部は、「宗教改革の展開」と題し、宗教改革から波及した事柄を中心に、16世紀後半以降を扱う論文を収録している。

宗教改革は、1517年にルターが贖宥状を論難する『95か条』を公にしたのに始まり、まず南ドイツの諸都市に、つづいて、ツヴィングリが指導するチューリヒを魁としてスイスの諸都市に波及した。通説では、ドイツとスイスの宗教改革は、当初緊密に連携していたが、1529年のマールブルク会談においてルターとツヴィングリが聖餐論で一致できなかったことを契機に断絶の兆しを見せ始めた、とされる。『ヨーロッパ宗教改革

の連携と断絶』に収録されている四つの論文も、直接間接に、本稿の主題、ドイツとスイスの宗教改革の断絶に触れている。本稿は、この四論文に対する論評を通して、主題について考察を加えるものである。その四論文とは、第一部第一章、野々瀬浩司「ルター派の形成過程における連携と断絶—ツヴィングリ派との関係を中心に—」（27～40ページ）、同第三章、和田光司「カルヴァン派の展開—対スイス関係を中心に—」（55～74ページ）、同第五章、西川杉子「長期の宗教改革運動—十七、十八世紀の展開」（91～106ページ）、第二部第八章、岩倉依子「ドイツ・スイス福音派の連携と断絶—『ヴィッテンベルク一致信条』をめぐって」（157～174ページ）である。

論評の対象とした四論文のうち、野々瀬（敬称略、以下同様）と岩倉の論文は、その表題から窺えるように、本稿の主題に直接触れている。両論文は、通説に沿って、1530年代半ばまでに、ドイツの宗教改革派とスイスの宗教改革派との間に永続的な断絶がもたらされ、その反面でドイツの宗教改革派とスイスの宗教改革派それぞれの内部には恒久的な連携がもたらされた

ことを主張する。それに対して、和田の論文は、1530年代半ばにおいても、スイスの宗教改革派が完全に統一されたわけではなく、ツヴィングリ派だけでなくルター派も存在したこと、スイスにおいてカルヴァン派の優位が確立する16世紀末までは、カルヴァン派とツヴィングリ派、ドイツおよびスイスのルター派の間に多様な関係が存続したことを指摘し、野々瀬、岩倉とは異なる観点を打ち出していて興味深い。西川の論文も、17、18世紀の宗教改革運動を考察の対象として、諸宗派が国民間で断絶したことよりもトランスナショナルに連携したことを強調する新しい観点を打ち出している。その観点は、本稿の主題を考える際にも参考になるであろう。

第2章 『ヴィッテンベルク致信条（1536）』の意義 ー野々瀬・岩倉の断絶論

本章では、野々瀬と岩倉の論旨を確認する。まず、野々瀬の論旨を辿ることにしよう。

野々瀬は、16世紀前半のドイツとスイスの宗教改革の歴史を、四期（1529年まで、マールブルク会談、アウクスブルク帝国議会とシュマルカルデン同盟の結成、『ヴィッテンベルク致信条』以後）に分けて、プロテスタントの三勢力、ルター派とスイス改革派、西南ドイツの諸都市の連携と断絶という視角から叙述する。

野々瀬は、各期の主な出来事として、以下のことを指摘する。

1529年以前、ルター派が領邦君主に教会の管理・指導を委ねる領邦教会制を形成していったのに対し、スイス改革派は、共同体原理に基づく宗教改革を推進した。両者は、ルター派が1529年のシュパイアー帝国議会の決定に共同で抗議し、スイス改革派が「キリスト教都市同盟」に結集したように、カトリック勢力に対抗するためにそれぞれの内部では連携を強化した。しかし、両者間の連携は、それぞれの指導者、ルターとツヴィングリの聖餐論の違いによって進展しなかった。なお、聖餐論争については、岩倉論文を検討する際に言及することにして、ここでは立ち入らない。一方、第三のプロテスタント勢力、西南ドイツの諸都市は、当初、ツヴィングリの影響を受けて、共同体原理の下に宗教改革を導入した。しかし、共同体宗教改革の影響を受けたドイツ農民戦争が鎮圧されると、いくつかの都市は、ツヴィングリ主義を共同体宗教改革運

動と繋がる危険な思想と警戒し、ツヴィングリとの提携を修正し始めた。

皇帝がプロテスタントを圧迫する態勢を整える中で、ヘッセン方伯、フィリップは、プロテスタントの大同盟を構想し、1529年10月、三勢力の代表をマールブルクに招集した。参加者は、ほとんど全ての問題で一致したものの、聖餐に関するルターとツヴィングリの対立を解消するにいたらなかった。西南ドイツの諸都市の代表の一人、シュトラースブルクのブツァーは、会談の過程で、一旦ルターに近い見解を表明している。マールブルク会談の結果、ルター派とスイス改革派との断絶は決定的となり、西南ドイツの諸都市において、ツヴィングリに代わって、ルター派への接近を示すブツァーの発言力が強まった。

1530年1月、皇帝、カール5世は、対トルコ戦争に備えて帝国内の宗派对立を平和的に解決することを目論み、諸身分に来るべきアウクスブルク帝国議会で信仰上の立場を明らかにするように求めた。その帝国議会には、ルター派から『アウクスブルク信仰告白』が、西南ドイツの四市（シュトラースブルク、コンスタンツ、メミンゲン、リンダウ）から『四都市信仰告白』が、スイス改革派からツヴィングリの個人名で『信仰の弁明』が提出された。聖餐に関して、『アウクスブルク信仰告白』と『信仰の弁明』は、ルターとツヴィングリの従来の見解を踏襲する。これに対して、『四都市信仰告白』は、ルター派への接近を意図してルターへの批判を抑えている。帝国議会開催中に行われたルターと『四都市信仰告白』の起草者、ブツァーの会談も、両者の間で聖餐論に関して意思疎通が可能であることを確認した。しかし、帝国議会が宗派对立の解消を果たせないままに終了したので、ドイツのプロテスタント勢力は、1531年2月、皇帝を中心とするカトリック陣営に対抗するためにシュマルカルデン同盟を結成した。『四都市信仰告白』の四市も、ルターとブツァーの先の確認を前提としてこの同盟に加盟し、『アウクスブルク信仰告白』の承認を同盟に新規加入する際の条件とすることに同意している。ルター派と西南ドイツの諸都市の連携が強まる一方、1531年10月、第二次カベル戦争でチューリヒが敗北し、ツヴィングリが戦死したことで、ツヴィングリ主義の影響力は、スイスだけでなく、西南ドイツの諸都市でも著しく後退した。西南ドイツの諸都市でこの趨勢が強まるのには、農民戦争以後共同体宗教改革への警戒心が高まったことに加えて、内政上の変化に伴って領邦教会制が形成されたことも寄与している。

ルター派と西南ドイツの諸都市の連携強化は、1536年、ついに『ヴィッテンベルク一致信条』（以下、『一致信条』と略記）の成立にいたった。ルター派のメランヒトンの起草になるこの一致信条は、事実上、西南ドイツ諸都市のブツァーたちがルター派に歩み寄ったのに等しい内容だった。『一致信条』には、スイスの諸都市とコンスタンツなど一部の西南ドイツの諸都市を除いて、南ドイツの主要なプロテスタント都市も合意したので、これを契機に、一方では、南ドイツでルターの影響がいっそう強まり、他方では、スイスの宗教改革派が独自の道を歩むことになった。スイスの宗教改革派の内部で連携の流れが加速していく足跡は、1536年にスイスのドイツ語圏における宗教改革派の一致を達成した『第一スイス信仰告白』、1549年にツヴィングリ派とカルヴァン派の聖餐論における分裂を克服した『チューリヒ和協書』、1566年にスイス改革派の統一信条として成立した『第二スイス信仰告白』に辿ることができる。

野々瀬は、以上の指摘を踏まえて、次のように結論する。総じて、マールブルク会談の決裂と第二次カペル戦争によって、西南ドイツの諸都市は、ツヴィングリ主義から離脱する一方で、ルター派との対話と妥協を模索し、信仰上譲歩するのを余儀なくされた。その結果、ドイツとスイスの宗教改革派の断絶が明確になり、その反面、それぞれの内部で連携の動きが強まったのである、と。

岩倉も、野々瀬と同様、『一致信条』が、ドイツとスイスの宗教改革派間の永続的な断絶を、その反面でドイツとスイスの宗教改革派内部に恒久的な連携をもたらした、とする。岩倉は、ブツァーたちがプロテスタントの三勢力の一致を目指したにもかかわらず、結果的にドイツとスイスの宗教改革派が断絶するにいたった背景を明らかにしようとする。特に、ルターとツヴィングリの後継者であるプリンガー、ブツァーの聖餐に関する議論の仕方を検討して、それぞれがどのような一致を求めたのかを解明することに焦点を絞る。

岩倉の論旨を辿る前に、行論の都合上、周知のことではあるが、先行研究に基づきルター、ツヴィングリ、ブツァーの聖餐論を確認しておきたい¹⁾。

ルターは、聖餐の礼典を設定したキリストの言葉、「これは私のからだである」（マタイ26章26節）を文字通りに解釈して、聖餐のパンの中にキリストのからだが生肉に現在する、と主張した。ルター派の『アウクスブルク信仰告白』は、その第10条で、「キリスト

の真のからだは血は聖餐におけるパンとぶどう酒の形のもとで真に現在し、そこで分け与えられ、受け取られる」、と規定している。また、ルターは、聖餐への参加は信仰の有無を問わず、すべての者が聖餐に参加することによって罪の赦しを得る、と主張した。

これに対し、ツヴィングリは、聖餐設定のキリストの言葉を比喩とみなし、「キリストのからだを意味する」と解釈する。パンはキリストのからだそのものではなく、その「しるし」にすぎず、キリストのからだは聖餐において霊的にのみ現在する、と主張した。また、聖餐は信者の霊的交わり、信仰告白の行為である、したがって信仰をもった者のみが、聖餐においてキリストのからだを「魂の食事」として味わうことができ、と主張した。

ブツァーは、聖餐論において、当初ツヴィングリに同意していたが、再洗礼派や聖霊主義者との対決を通してルターに接近した。ブツァーが起草した『四都市信仰告白』は、聖餐について、「キリストは真のからだと血を、真に食べ飲むために、魂と永遠の命のための食物、飲物として与えた」と規定し、『アウクスブルク信仰告白』に近づいている。ただし、「魂…のための食物」という言葉を入れて、信仰者のみに与えられる賜物であるとのツヴィングリ的な主張を保持している。

では、以上の確認を踏まえて、岩倉の論旨を辿ることにしよう。岩倉によると、1534年12月、ルター派との一致を目論むブツァーが西南ドイツ諸都市の会議をコンスタンツに招集すると、ツヴィングリの後継者、プリンガーは、ルター派との一致の条件として聖餐に関する信仰告白を作成し、ブツァーに送った。それは、「（聖餐において）キリストの真のからだは真の血は、……真に現在し、信者に与えられ、授けられる。彼らは、信仰によってキリストの真のからだは真の血を食べ、飲むのである。」、とする。これは、たしかに、キリストのからだが生肉に現在すると明言せず、信者に与えられ、信仰によって食べられるとする点でツヴィングリの聖餐論に基づいているものの、霊的にのみ現在するとも明言せず、『アウクスブルク信仰告白』を念頭に、キリストのからだが生肉に現在し、与えられるとする点で、ルター派に接近していると見ることができる。1536年2月にプリンガーの強い影響力の下で作成された『第一スイス信仰告白』も、ベルンがプリンガーの先の信仰告白を拒絶したことを配慮したのか、ルター派への接近から一歩退いた表現になっているが、基本的には、同趣旨である。

コンスタンツにおける西南ドイツ諸都市の会議を踏まえて、1536年5月、ルター派と西南ドイツ諸都市の神学者がヴィッテンベルクで会談し、『一致信条』で合意に達した。『一致信条』は、聖餐について、「キリストのからだは血は、パンとぶどう酒とともに、真に、そして本質的にそこにあって、授けられ、受け取られる」と規定する。この規定は、ほぼルター派の『アウクスブルク信仰告白』に沿うものである。しかし、『アウクスブルク信仰告白』がキリストのからだはパンの「形のもとで真に現在する」と規定し、キリストのからだはパンの一体性、キリストのからだの肉体的現在を強調するのに対して、『一致信条』は、パンと「ともに」と規定するだけで、キリストの現在の仕方についてヴェールをかぶせた表現にとどめている。また、『一致信条』は、キリストのからだは血がそれを「受けるにふさわしくない者にも真に与えられ、受け取られる」と規定する。この「ふさわしくない者」という規定は、それを不信者と解釈するルターにも、不信者を除外して、信者ではあるが真の信仰生活を実践していない者と解釈するブツァーにも受け入れ可能な表現だった。こうして、岩倉によれば、『一致信条』は、一部の文言に解釈の幅を残すことによって、ルター派と西南ドイツ諸都市の一致の可能性を作り出し、両派を政治的に統一するシュマルカルデン同盟を存続させる基盤を打ち立てたのである。

『一致信条』に基づいてルター派と西南ドイツ諸都市の連携が達成されたのを受けて、ルターは、スイスの宗教改革派に『一致信条』を承認させる交渉をブツァーに依頼した。スイスの宗教改革派は、当初、『一致信条』に異議を唱えるチューリヒ、ベルンとそれに同意するバーゼル、ザンクト・ガレンに分かれたが、最終的には、1537年1月、プリンガーの手になるチューリヒの「信仰宣言」を承認した。それは、全体として『一致信条』と同じ考えであるとしつつ、聖餐に関して、キリストの現在が肉体的ではなく霊的であり、不信者は聖餐を受けるにふさわしくない、と明確に表明している。基本的にはツヴィングリの見解に留まり、『一致信条』との違いを際立たせている。

岩倉は、以上の『一致信条』をめぐる交渉経過から、次のように結論する。ルターが自説の貫徹を前提とする一致を求めたのに対し、プリンガーは、聖餐論における相違を認め合った上で的一致を求めた。したがって、両者が真に一致することは到底期待しえなかった。一方、ブツァーは、聖餐に関する本来の見解を放棄したわけではないが、ルターに譲歩した。というの

は、シュトラースブルクの政治的安全を確保するためには、シュマルカルデン同盟を存続させなければならぬという政治的要請があったからである。こうして、ドイツとスイスの宗教改革派間に永続的な断絶がもたらされ、その反面でドイツとスイスそれぞれの宗教改革派内部には恒常的な連携がもたらされたのである。ドイツ内部の連携の証が『一致信条』であるとするれば、スイスのそれは、『第一スイス信仰告白』と『チューリヒ和協書』に他ならない、と。

第3章 『一致信条』後におけるスイスの宗教改革派の対外関係

前章で見たように、野々瀬と岩倉は、『一致信条』後、スイス宗教改革派はドイツのそれと断絶し、その反面で内部的連携を強化した、という。筆者は、この主張の当否を判断するために、チューリヒについてスイス宗教改革の拠点となったベルンとバーゼル、『一致信条』の年からカルヴァンが活躍を開始したジュネーヴを取り上げて、それぞれの宗教改革派の対外関係を検討してみたい。なお、ここでは、和田の前掲論文と“The Oxford Encyclopedia of the Reformation”（以下、O.E.R.と略記）における当該都市に関する記述を参照した。

まず、ベルンについて。ベルンの宗教改革が、ツヴィングリの強い影響下に進行したことはたしかである。O.E.R.によれば、その指導者、ハラーは、ツヴィングリにはじめて会った1521年以降、彼から強い影響を受けつづけた。1528年のベルン討論会の議論を支配したのもツヴィングリであり、その結果導入されたベルンの宗教改革がチューリヒのそれに酷似していたのも当然である。ツヴィングリ亡き後も、ハラーは、さまざまな宗教問題でプリンガーと文通をつづけるのである²⁾。しかし、和田は、ベルンを単純にツヴィングリ派の都市とすることは許されない、という。すなわち、ベルンは、すでに宗教改革導入時から、チューリヒにとどまらずシュトラースブルクとも結びつきがあったが、1531年のツヴィングリの死去後、ジュネーヴにいたる上部地方の支配権をめぐるサヴォワとの抗争のため、軍事的支援を期待するドイツへの接近を強めた。ベルンは、この関連で、ブツァーのプロテスタント諸派の一致運動にも期待したのである。ドイツとの関係が強まった結果、ベルンでは、ルター派の存在も確認されるにいたる。ベルンは、たしかに、『第一

スイス信仰告白』を維持し、『ヴィッテンベルク一致信条』に反対を表明したように、ツヴィングリ派の外見を保ちました。しかし、1537年以後、ルター派の影響が顕著になり、1540年には、やがてベルンにおけるルター派の頭目となるスルツァーが着任した。ベルンがルター主義化を停止し、名実ともにツヴィングリ派へ回帰するのは、1547年のシュマルカルデン同盟の敗戦でドイツからの軍事的支援が見込めなくなってからであった。筆者は、和田が指摘するブツァーとの協調やルター派の伸張振りを見れば、1547年以前のベルンの宗教改革派に関して、ドイツの宗教改革派から分断し、一括りにツヴィングリ派としてしまうことは、当を得ない、と考える。

次に、バーゼルについて。周知のごとく、バーゼル宗教改革の指導者、エコランパディウスは、ツヴィングリと、マールブルク会談でツヴィングリを支援したように聖餐論において共通点が多いものの、自律的教会訓練を強調する点では異なっていた。O.E.R.によれば、エコランパディウスの自律的教会訓練論は、やがてブツァーも受け入れるところとなり、両者は、コンスタンツのブラーラーと協力して、1531年、自律的教会訓練を組み込んだウルムの宗教改革に貢献する。ウルムは、シュマルカルデン戦争で皇帝軍に占領されるまで、コンスタンツとともに西南ドイツの都市の中にあって、『アウクスブルク信仰告白』も『一致信条』も認めていない独自の立場を維持したのである³⁾。

エコランパディウスはツヴィングリの後を追うようにして死去するが、O.E.R.によれば、その後継者、ミコニウスもブツァーとの関係を保ち、彼のプロテスタント諸派の一致を目指す努力を支持した。バーゼルは、ブツァーの努力で成立する『一致信条』を受け入れたスイスで唯一の都市となる。1552年に死去したミコニウスの後継者となったのは、1548年に追放されるまでベルンにおいてルター派の頭目であったスルツァーである。彼が精力的に活動しルター派を根づかせたので、バーゼルは、スイス改革派の諸都市と疎遠になり、1566年の『第二スイス信仰告白』への署名も拒否するにいたった。スルツァーがバーゼルでいつも全面的に支持されたとはいえないが、バーゼルがスルツァーの路線を脱し、スイス改革派の諸都市と歩調を合わせるようになるのは、1585年に彼が死去した後のことである⁴⁾。ともあれ、筆者は、バーゼルについても、O.E.R.に指摘されているブツァーとの協調やルター派の伸張を見れば、『一致信条』後、ドイツの宗教改革派から断絶し、スイスの宗教改革派に連携しつづけたとするわ

けにはいかない、と考える。

最後に、ジュネーヴについて。野々瀬も岩倉も、カルヴァンがプリンガーと協力して作成した『チューリヒ和協書』(1549年)を、スイス改革派内部の連携の証として重視する。はたして、カルヴァンは、1536年にジュネーヴでその活動を開始して以降、この連携の追及を対外関係の基本路線とした、といえるのだろうか。

和田によれば、カルヴァンの対外関係を規定する根本的な関心は、フランス国内におけるプロテスタントの迫害を抑止するため、ドイツのプロテスタント諸侯やスイスをフランスへ介入させることにあった。カルヴァンは、ジュネーヴで活動を開始した時点で、ルター派とツヴィングリ派の一致を目指すブツァーに関心を示すのであるが、それもこの関連に他ならない。その後、カルヴァンは、ジュネーヴ教会を強権的に統合しようとするベルンに教会の自律性を維持する立場から反対したため、1538年にジュネーヴから追放され、1541年までシュトラースブルクに移らざるをえなかった。シュトラースブルク滞在中も、カルヴァンは、当初の根本的な関心を持ちつづけた。たとえば、シュマルカルデン同盟のドイツ諸侯と接触して、彼らをフランスに介入させようとしたし、ブツァーの宗派一致運動にひきつづき協力し、その立場から『一致信条』にも同意したのである。1541年にジュネーヴ帰還を許されたカルヴァンは、1542年以降フランスでの迫害が激化するのを目の当たりにして、シュマルカルデン戦争に敗れたドイツ諸侯による介入が期待できなくなる中で、スイス改革派諸都市との関係強化を図ることになる。カルヴァンがプリンガーとの間に『チューリヒ和協書』を成立させたのも、このような脈絡においてである。しかし、カルヴァンは、『チューリヒ和協書』の成立後も、ドイツのルター派との関係を断念したわけではない。1556～57年には、ルター亡き後のルター派の指導者、メランヒトンとの接触をプリンガーに提唱しているし、1557年には、使者をヴォルムス帝国議会に派遣して、プロテスタント諸侯との関係を再構築する可能性を探らせてもいるのである。和田のこのような指摘を踏まえると、筆者は、カルヴァンが『チューリヒ和協書』を成立させたことに関しては、当時の特殊事情を考慮に入れるべきであり、『一致信条』後のカルヴァンの活動を、一貫して、ドイツ宗教改革派からの断絶とスイス改革派内部の連携という視角から捉えることはできない、と考える。

以上のベルンとバーゼル、ジュネーヴの対外関係に

関する検討から、『一致信条』の成立後、スイスの宗教改革派がドイツの宗教改革派から断絶し、その反面内部で連携を強めたと言えは言えないことが明らかだとすれば、これと裏腹の関係にある、ドイツ宗教改革派のスイス宗教改革派からの断絶と内部での連携という問題についても検証してみるべきかもしれない。すでに、本稿も、この問題に係わりのあるいくつかの事実に触れてきた。すなわち、ブツァーが、『一致信条』の作成にあたって、シュマルカルデン同盟の存続という政治的要請からルターに譲歩したとはいえ、聖餐に関する彼本来の見解を放棄したわけではないこと、また、ブツァーがバーゼルのエコランパディウスらと協力してウルムに自律的教会訓練に立脚する宗教改革を実現し、ウルムがドイツ宗教改革派の中にあって暫くは独自の立場を維持したことなどである。ブツァーが、エコランパディウスから受け継いでカルヴァンに伝えたと言われる自律的教会訓練の理念を実現するために、シュマルカルデン戦争の敗北によってシュトラースブルクから追放されるまで市参事会と軋轢を繰り返しながら粘り強く戦ったことも、よく知られている。現在も宗教改革史研究に大きな影響を及ぼしつづけているB. メラーも、西南ドイツの諸都市が、1530年代にはブツァーの霊的指導の下にあって、まだルター主義と深くは一致していなかったこと、その状態が崩壊する決定的な理由はシュマルカルデン戦争の敗北に伴う時代の厳しさであり、ウルムとシュトラースブルクでルター主義が支配するのに至るのは、ようやく1553年と1561年であることを指摘している⁵⁾。しかし、本稿は、「はじめに」で述べたように、四つの論文に対する論評を通して主題に迫るのを趣旨としているので、この問題にはこれ以上立ち入らない。

第4章 国民的断絶論の見直し

筆者は、宗教改革派が、『一致信条』を機に、ドイツとスイスの間では断絶し、それぞれの内部では連携を強める、という野々瀬と岩倉の議論には、宗教改革の発展を規定する最も強固な枠組みを国民に見て、それぞれの国民の中で支配的になった宗派相互の差異や対立を強調しようとする傾向が顕著に見られる、と思う。西川は、前掲論文で、従来の宗教改革史研究に広く見られるこの傾向を批判して、次のようにいう。「プロテスタント諸派には……宗派对立があったことは明白であるが、従来の研究は差異や対立を強調するあま

り、プロテスタント諸派の連帯意識や宗派对立を越えようとする融和の傾向を軽視してきた……プロテスタントの宗派を越えた、さらに地域的にも領邦国家・主権国家を越えた、トランスナショナルあるいはコスモポリタンな連帯があったからこそ、(宗教的少数派であっても―筆者注) 存続しえたプロテスタント共同体の例は多い。」(92ページ)。西川は、その例を17, 18世紀にわたってヨーロッパ規模で挙げていく。西川の論文が考察の対象とする時期は本稿のそれとは異なるので、ここではその詳細に立ち入らないが、西川が打ち出す新しい観点は、本稿が取り上げてきた問題を考える際にも参考になる。カルヴァンがフランスにおけるプロテスタントの迫害を抑止するためにドイツとスイスの宗教改革派を介入させようとした、との和田の指摘も、この観点から注目し値する。さらに、この観点に関連して、今まで述べてきたことについて、二、三のことを指摘しておきたい。

まず、野々瀬が、1566年の『第二スイス信仰告白』をスイス改革派内の連携の深まりの証とすることについて。このような評価は、この文書の成立の経緯と広がりを考えるならば、一面的だといわざるをえないだろう。O.E.R.などによると、『第二スイス信仰告白』は、もともとは、重病の中にあったプリンガーがチューリヒ教会への遺言のつもりで書いた私的な文書である。しかし、それが公になる直接的なきっかけは、ドイツのプファルツにおける宗教改革の特別な必要であった。1555年のアウクスブルク宗教平和は、ドイツにおいてカトリックとルター派の並存を許したが、改革派教会にはいかなる特権も与えていない。その中で、プファルツ選帝侯、フリードリヒ3世は改革派の宗教改革を進めようとしたので、ルター派からの厳しい攻撃にさらされることになる。その攻撃から身を守るために、選帝侯は、プリンガーに改革派信仰を十分に弁明しうる文書を送るように要請した。それに応えてプリンガーが送った文書が、すでに手許にあった『第二スイス信仰告白』に他ならない。この文書は、たしかにスイスの改革派諸邦で受け入れられたのであるが、それにとどまらず、プファルツ、さらにスコットランド、ハンガリー、フランス、ポーランドなどの改革派教会でも受け入れられていくのである⁶⁾。筆者は、この文書について、スイス改革派内部の連携という国民的な観点にとどまらず、まさにトランスナショナルな観点から見直してしかるべきだ、と考える。

つぎに、ブツァーが、聖餐をめぐるルターとツヴィングリの見解の相違を解消して、その一致を達成しよ

うとしたことについて。宗派の対立を強調する従来の研究にあって、ブツァーのこの活動は、かならずしも高い評価を受けていない。ブツァーは、野々瀬によれば、聖餐論争において結局はルターに歩み寄り、ドイツの宗教改革派がルター派に統合されていくのに一役を果たした存在にすぎない。一方、メラーによれば、ブツァーは、その神学がツヴィングリに非常に近く、1530年代の南ドイツにおいてルター主義と対抗するツヴィングリ主義の霊的指導を担った存在として位置づけられる⁷⁾。いずれにしろ、ドイツのルター主義対スイスのツヴィングリ主義という対立図式の中で、ブツァーは、どちらかの宗派の中に組み込まれる存在とみなされ、その独自性が十分に評価されてきたとはいえない。そのことについて、すでに、ルター派の教会史家ホルが次のように反省の弁を述べている。「わたしはこれまでブツァーをひどく不当に扱ってきた。〈調停屋〉、融通無碍の外交官といった野卑なイメージを信じていたのです。」⁸⁾ 筆者は、西川が唱えるように、宗派の差異や対立よりも連帯や融和にこそ注目すべきであるとするならば、宗教改革諸派の一致を追求したブツァーの活動はもっと評価されてしかるべきだ、と考える。

なお、国民という枠組みを重視してドイツとスイスの宗教改革の断絶を論じるときには、スイスが帝国からの政治的独立をすでに達成していたという理解を前提にしているように思われる。たとえば、メラーも、「上部ドイツの諸都市が（スイスに由来する－筆者注）ツヴィングリ主義の宗教改革を採用することによって、シュヴァーベン戦争以後事実上おこなわれていたスイスの帝国からの離脱は、法的にはともかく、少なくとも宗教的分野において、今一度解消された」、と述べている⁹⁾。しかし、スイスが帝国から政治的に独立していたという理解に関しては、スイスがシュヴァーベン戦争後も帝国へ帰属しつつあったとする有力な反論がある¹⁰⁾。筆者は、この反論に根拠があると認められるならば、ドイツとスイスの宗教改革の断絶論はこの点からも見直されてしかるべきだ、と考える。

- 1) 出村彰『ツヴィングリ』、日本基督教団出版局、1974、266-280

南純「解題 マルティン・ブツァー」、『宗教改革著作集第六巻－ツヴィングリとその周辺Ⅱ』、教文館、1986、401-4

マルティン・ルター（徳善義和訳）「小教理問答」、フィリップ・メランヒトン（徳善義和訳）「アウクスブルク信仰告白」、マルティン・ブツァー（石引正志訳）「四都市信仰告白」、『宗教改革著作集第十四巻－信仰告白・信仰問答』、教文館、1994、29、40、146-7

なお、聖餐論争に関する近年の刊行物に、ヴァルター・ケーラー（瀬原義生訳）「ツヴィングリ、ルターの聖餐論争とマールブルク会談」、『立命館文学』第607号、2008がある。

- 2) J.W.Baker, Berchtold Haller, The Oxford Encyclopedia of the Reformation vol.2, 1996, 208-9
- 3) E. T. Dugan, Ulm, The Oxford Encyclopedia of the Reformation vol.4, 1996, 193-5
- 4) A. N. Burnett, Basel, The Oxford Encyclopedia of the Reformation vol.1, 1996, 125-7
- 5) B. メラー（森田安一他訳）『帝国都市と宗教改革』、教文館、1990、131-7
ブツァーについては、出村彰『スイス宗教改革史研究』、日本基督教団出版局、1971、第三、四章と渡邊伸『宗教改革と社会』、京都大学学術出版会、2001、第七章も参照されたい。
- 6) T. George, Helvetic Confessions, The Oxford Encyclopedia of the Reformation vol.2, 1996, 220
渡辺信夫「解題 ハインリヒ・布林ガー『第二スイス信仰告白』（1566年）」、『宗教改革著作集第十四巻－信仰告白・信仰問答』、教文館、1994、680-2
- 7) B. メラー、前掲書、117-9
- 8) 南純、前掲論稿、406
- 9) B. メラー、前掲書、116-7
- 10) B. Braun, Die Eidgenossenschaft, das Reich und das politische System Karl V., 1997
拙稿「1500年前後における誓約同盟と帝国との関係」、『西南女学院短期大学研究紀要第46号』、1999

Discord between the German Reformation and the Swiss Reformation

Shinichi Yanagisawa

<Abstract>

Through its comment on four articles in a book entitled “ Concord and Discord between the European Reformations “, this review examines concord and discord between the German Reformation and the Swiss Reformation in the 16th century.

Lutherans in North Germany and Protestants in the cities of South-West Germany accepted Wittenberg Concord (1536), but Protestants in Switzerland rejected it. Nonose and Iwakura insist that their attitudes toward Wittenberg Concord brought about the following result; while relationship between German Protestants and Swiss Protestants became discordant permanently, relationship inside German Protestants and one inside Swiss Protestants became concordant lastingly. On the contrary, Wada points out next remarkable facts that Swiss Protestants were not simple, but composed of not only Zwinglians but also Lutherans and that Calvin would unite German Protestants and Swiss Protestants and mobilize them into France to prevent persecution of French Protestants. And Nisikawa sees movements of the Reformation in 17th and 18th centuries from a new perspective, which puts more emphasis on transnational concord than international discord between sects. This perspective seems beneficial to examination of relationship between the German Reformation and the Swiss Reformation in the 16th century.

Keywords: Lutheran, Zwinglian, Bucer, Calvin, Wittenberg Concord